

カブの栽培法

2011/10/10

日本種苗協会長崎県支部/市川種苗店

タネまき

カブは根の大きさによって(※1)大カブ、中カブ、小カブに分けられるが、小さいほど早く収穫できる。小カブは年中作れるが(※2)、秋まきでタネまきから40～50日、中～大カブで60～用100日見当で収穫できる。代表的な小カブ作りの要点を述べると、うね巾90cmの高うねを作り、2条のすじまきとする。クワ巾のまき溝にタネをまき、タネの2倍の厚さに土をかけて軽く押しておく。土に湿り気がある状態での播種が理想であるが、乾燥がひどい場合は播種半日ほど前に灌水しておくといよい。種子が小さいので播種後の灌水は控えたほうが賢明である。

(※1)最近は大蕪専用種、大中小兼用種、中小兼用種と三種類に分けられる。

(※2)蒔き巾が広いのは事実であるが、九州では5～8月/上(高温多湿)、12～2月(抽苔)は避けたほうがよい。

施肥

元肥として速効性の化成肥料を中心に1㎡あたり、窒素15～20g、リン酸10～15g、カリ10～12g(全成分量)を施す。元肥1/3、追肥1/3×2回として、8:8:8の配合肥料では一回あたりの施肥量は約60g/㎡と計算できる。

間引き

3～4日で発芽するので子葉展開の頃に第1回目、本葉2枚展開時に第2回目、本葉4枚ぐらになって第3回目の間引きをし株間を9～12cmになるようにする。

その後の管理

追肥は第1回と2回の間引き後と最後の間引きの15日位あとに施す。中耕は各間引きの度に、また土寄せは第2回目の中耕の時にやる。乾燥し過ぎるとよくないので、薄い液肥で追肥と灌水を兼ねて行くと効果的である。カブはマイナーな作物であり、登録農薬の種類が著しく少ない。従って、コナガやヨトウやキスジノミハムシなど大発生してからでは効果的な薬が少ないので、農薬を使用するにしろ耕種的方法にしろ予防処置を早めに講じておくことが重要である。

さて、小カブは栽培期間の短かさから、果菜類や他の野菜の前作・間作・混作として重要な根菜であり作付けが増えているが、(第一項で述べたように)品種と作型選びは慎重に行なっていただきたい。

※一部又は全部の引用を禁止いたします

